

メルヴィル『白鯨』における友愛の可能性

飯川 貴大

1. メルヴィルと友情

ハーマン・メルヴィルの『白鯨』は名著として知られ、これまで非常に多くの批評が書かれてきた作品である。批評の対象は様々だ——当時の状況（南北戦争など）に関わる問題や人種問題、善と悪の表象、同性愛、そして友情など枚挙に暇がない。このうち、友情に関しては、主に作品の語り手であるイシュメルとクイーケグ（次にエイハブとピップ）の関係について論じるものが多い。確かに二人はホテルでの出会いにて、読者からみてもわかりやすく「特別な関係」となり、以後行動を共にしていく。しかし、この二人の関係自体について論じているものは少ないと思われる。というのも、二人の友情を論じている多くのものは、関係それ自体ではなく、関係によってイシュメルやアメリカにおける支配的イデオロギーに与えられる効果の方により多くの注意が置かれているように思われるからである。例えば、後に検討することになるが、キャロライン・L・カーチャーは二人の関係を、イシュメルに人間性を結びつけさせ、エイハブ主導の破滅を導くことになる白鯨追跡に対して抵抗する契機として捉えている（Karcher 71-72）。彼女の主な関心は、簡単に言えば、二人の関係形成が最終的にイシュメルを生き残らせるような影響を与える、ということにあるように考えられる。まとめると、カーチャーのように、二人がつくる関係によってイシュメルなどに与えられる影響、効果についてが主に論じられているなか、その関係自体の分析はその効果の考察への通過点として扱われることが多い。

しかし、そもそもイシュメルとクイーケグの関係とはどのようなものなのか。その関係は果たして（いわゆる）友情なのであろうか。というのも、二人の関係について多くの分析が為されてきたが、二人の間の関係についての見解は必ずしも一致しないからである。結婚に関連させて分析する批評家や同性愛に関係づける者、または兄弟愛的な、つまり理想的な関係として解釈する者など、二人の関係に対する統一した解釈はない。ただ、二人の間の友情ということが前提に議論が進められるのであるが、そもそも友情とは何なのか、という議論が抜けているのではないのか。また、友情と（同）性愛の相違点はどこにあるのだろうか。そして、『白鯨』という作品において、異なる人種である人物と「友情」を結ぶことはどのような意味をもつのだろうか。こういった疑問は掘り下げられるべきであろう。そこで、本稿では分析の主題として友情、友愛を設定し、

主にイシュメルとクイークエグの関係についての友愛の可能性を探ることにはしたい。そのために大きく分けて、人種、そして同性愛（性愛）という2つの観点から、彼らの関係についての今までの批評をまとめ、さらにそれらの批評が論じ切れていないポイント、あるいは問題点を指摘しながら、友愛の可能性を探る道筋を提示していきたい。具体的には、2節において、『白鯨』における人種と性愛の分析の意義について確認し、二人の親密な関係は（人種差別を生み出す）文化の規範とは別の仕方によってつくられうること、同性愛と友情が多分に文化の規範によってカテゴライズされている可能性があり、そこでは嫌悪される同性愛と推奨される理想のかたちの「友情」に分けられていることを示す。3節では人種と友情についての関係について述べ、イシュメルが人種に関わる身体的特徴によってクイークエグを理解しようとしたことが頓挫し、包摂できない他者性をクイークエグにイシュメルが認める限りで親密さを含む関係がつくられうることを分析する。4節においては、二人の関係を「友情」と批評する危険性について述べる。2節で述べることは異なり、同性愛との関係ではなく、「友情」という言葉そのものに備わるイメージが理想的な兄弟愛のそれを帯びていて、このために「友情」が多分にイデオロギー的になることを示す。5節では、友愛について同性愛とからめながら掘り下げていき、友愛と性愛の関係について考察する。友愛とは包摂できない他者との関係を結ぼうとすることであり、性愛はそれにより可能になると考えられる。最後に、友愛とは何かをまとめながら、友愛と愛の違いなどの今後考えるべき（問題）点や展望を示したい。

2. 『白鯨』における人種と性愛——友情との関係を中心に

まず確認しておきたいこととして、これまで数多くの批評家が指摘してきたように、イシュメルとクイークエグが乗り込むピークオッド号はアメリカ社会の一種の縮図と言える。これは例えば、鋸打ちたちのように様々な人種の船員がいることや、牧野有通が指摘するように、イシュメルが逃れたようにみえる陸上における「金」の支配するシステムは、むしろ「海」の世界で検証されることになる」ことから示される（55-56）。よって、本作品における友情を考える上で、アメリカの支配的イデオロギーと関連させずにすまずことはできない。

だからこそ、人種という要素を考えることは重要である。トニ・モリスンは“the white whale is the ideology of race”と言い、メルヴィルが本作品で白さがイデオロギーになった時を考察していると考えている（Morrison 15-16）。彼女の指摘を考えれば、正に『白鯨』が描くのは、人種の問題が文化の規範に組み込まれ、境界画定が行われた場なのであり、イシュメルとクイークエグの友情も物語中で形成されていく。また、その二人が乗るピークオッド号の船長であるエイハブは、牧野によると、「権力的に支配力を及ぼす壁のごとき存在」である白鯨を追っている（100）。牧野はレヴィアタンと神の権力関係が、絶対者である神の沈黙のために人々に恣意的に解釈されるために、

(エイハブによって) 白鯨とその背後にある権力体系との関係に地上化され、合理化されることになるという (161)。つまり、エイハブにとっては、物語中の白鯨はその背後にある権力体制、より詳しく言えば、アメリカの支配的イデオロギーを守る (突き破るべき) 壁という象徴であり、対抗の対象である。そしてイシュメルたち船員もエイハブの復讐の航海に付き合うことから、彼らも形式的には支配的イデオロギーに対抗していくことになる。だから、上のモリスンの引用から、その白鯨が象徴することになるイデオロギーは人種についてのもも含むと考えられるだろう。よって、彼らの航海を人種について画定される境界を破ろうとする旅である、ということもできると思われる。

そして、イシュメルがクイークエグとの関係において、人種差別を導くような排他的な文化の規範とは別の仕方では接することができれば、二人の親密な関係は結ばれうると言えるだろう。トニー・タナーは、もしこの作品が道徳を持っているならば、“it [a moral] is the very American one that we should respect the mysterious otherness of nature and not seek to possess it” と述べる (Tanner 22)。タナーが言わんとすることは、思考とつながる言語が所有、つまり文化の規範において何かをカテゴライズして恣意的に解釈することの可能性を持っているとしても、所有とは別のかたちで人は言語と関わり、思考しなければならないということである。また、そのような自然、そして他人を所有しようとしぬ関係こそ倫理と考えられ、友の関係につながると思われる。二人の関係において (特にイシュメルにとって)、人種についてのイデオロギーがどのように支配的なものでなくなるかを分析することが重要なのだが、では、支配的イデオロギーの境界画定からイシュメルたちはどのように脱することができるのか。

ところで、この疑問を考える前に、もう一つのポイントについて確認しておきたい。すなわち、同性愛と友情の関係についてである。イシュメルとクイークエグ、または他の船員たちとの関係は、同性愛ということを考えて複雑になる。というのも、同性愛と友情の違いがあまりはっきりしないと思われるからだ。例えば、『白鯨』のなかでイシュメルとクイークエグがロープでつながれながら作業するシーンがあるが、このときお互いの行為がお互いに影響するという感覚は、果たして友情なのか、それとも同性愛といえるのか。言い換えると、どのような状況のときには同性愛と解釈され、あるいはどのようなときにセクシュアリティを全く含まない友情だと理解されるのかわからないのである。つまり、最初に考えてみたいのは、性愛と友情は区別されるのかどうかということだ。

ミシェル・フーコーは同性愛をテーマにしたインタビューのなかで、軍隊の例をとりあげており、その例が上の疑問について考える一助となると思われる。彼はそのインタビューで軍隊の男たちの愛について以下のように述べる。

One can wonder how, in these absurd and grotesque wars and infernal massacres, the men managed to hold on in spite of everything. Through

some emotional fabric, no doubt, I don't mean that it was because they were each other's lovers that they continued to fight; but honor, courage, not losing face, sacrifice, leaving the trench with the captain—all that implied a very intense emotional tie. It's not to say; "Ah, there you have homosexuality!" I detest that kind of reasoning.

危険な場所でもともに寝泊りして、苦しい時間を送っている軍隊の人たちに「おまえはホモセクシュアリティをもつ」とは言えないと彼は言う。軍人たちが筆舌に尽くしがたいほどの残忍な環境に耐えるには、軍人たちの間での「強い感情的つながり」が必要である。その感情的つながり——ときには身を寄せ合うなど身体の接触を伴うだろう——は果たして同性愛と言えるのだろうか。フーコーは否と述べる。一方で、これが戦時中ではなく、通常の生活ではどうか。普通の家の中かで誰かがくっついて寝泊りし、常に飲食もともにするような状況では、その行動している当人たちのことについて、「ホモセクシュアルである」と言ってしまう人が多いのではないのか。あたかもホモセクシュアリティが文化の規範によって禁じられていると主張するように。

さらに、フーコーは同性愛が権力体制に対する不安要素となる原因について鋭く指摘する。彼によれば、セクシュアルな行為そのものが不安を招くのではなく、“that individuals are beginning to love one another there's the problem. The institution is caught in a contradiction; affective intensities traverse it” と彼自身が言うように、個人の間にも生まれる愛情こそが体制転覆的な効果を持つのである。権力体系は境界画定を通して、認可されるべき関係を肯定し、それ以外の関係の可能性をシャットアウトする。フーコーは、その禁止された関係を解き放ち、愛を導入することが同性愛であることを示唆している。ここで、同性愛の問題は人種のそれと交差する。なぜなら、同性愛のように支配的イデオロギーによる境界画定とは別の仕方でも形成する関係こそ、人種に左右されないということと同義であるように思えるからだ。よって、『白鯨』におけるイシュメルとクイクエグの友情について論じるときには、人種と性愛の問題をからめて考察していく必要があると思われる。

先ほど引用した箇所から、フーコーは（同）性愛と友情は区別されるべきではないという立場にいると思われる。同性愛というのは画定された境界をこえて関係を持つということであり、それが友情とも考えられるからである。ここで翻って考えてみれば、この「友情」という概念も同性愛と同様、多分に支配的イデオロギーに影響を受けていると言えるだろう。というのも、権力体系においては、体制転覆的な効果をもつ同性愛は許容されず、それ以外の関係を認めるならば、（認められない）同性愛以外の関係を「友情」という理想的な典型として推奨し、提示される必要があると推測できるからだ。つまり、支配的イデオロギーにおいては、友情と同性愛は差異化され区別されなくてはならない。だからこそ、イシュメルとクイクエグの関係について論じるときには、同性愛嫌悪という排他的特徴をもつ可能性のある「友情」という言葉に注意しなければな

らないだろう。

ここで当時の同性愛に関わる状況について確認しておこう。ロバート・K・マーティンによれば、19世紀当時、軍隊などでの男だけの空間では、“the encouragement of emotional attachments between men are designed to eliminate sexuality” というように性に関わるものは排除されるような体制があったという (Martin 12)¹。そのような性の可能性を排除した関係が同性愛嫌悪を含むホモソーシャルの関係であり、この関係が男だけの関係においては推奨される (Martin 12)。これは先に述べた同性愛を認めない「友情」の分析とつながると思われ、フーコーの議論を (全てではないにしても) 時代の異なる『白鯨』の分析に援用することができることを指すだろう。

しかしながら、境界画定を超えて関係をもつことが同性愛的なそれを必要とするならば、その関係は常に同性愛的でなければならないのか。すなわち、友情と (同) 性愛が区別されないのならば、境界画定で区別された者同士が友と言われるとき、その友誼とはどのようなかたちをとるのだろうか。だが、ひとまずこの問題は後の5節において言及することにして、まずイシュメルたちの関係がどのように文化の規範とは別の仕方で行成されるかを、「友情」のイデオロギー性について注意しながら考えてみたい。

3. 文化の規範とは別の仕方で行成される「友情」

これまで、イシュメルとクイークエグの (それが意味するのは何であれ) 「友情」は、主に前者が後者についての認識を改めるという読み直しを通して行成される、と分析されてきているように思われる。例えば、キャロライン・カーチャーは二人の関係の形成を、イシュメルが人種のステレオタイプに頼る判断から脱することによって達成されるものだと考えている。彼女によれば、“the composite racial figures that Melville created to undermine racial categories and to inculcate the lessons in racial tolerance and cultural relativism” をクイークエグが表象しており、イシュメルが彼と接触していくことで “the lessons in racial tolerance and cultural relativism” を体験し、達成していくという (Karcher 65)。具体的に彼女の論をたどろう。まず彼女は、イシュメルが自分のなかの二つの偏見を克服すると主張する。イシュメルがある宿屋で部屋数が足りないために見知らぬ銛打ちとともに寝なければならないと伝えられたとき、この銛打ちに対して偏見を抱くのだが、この偏見は異人種に対するものではない。先に部屋でベッドに入っていたイシュメルはクイークエグが部屋に入ってきた後で姿を見ても、彼のことを白人とみなしていた。このとき “And what is it, thought I, after all! It's only his outside; a man can be honest in any sort of skin” (Melville 19) と語られるが、この「人は見かけによらない」という偏見の克服は主に白人のみを対象とするものである。その証左として、クイークエグが服を脱ぎベッドに飛び込んでくるところで、イシュメルは彼が異人種であることを発見し、恐怖することが挙げられる。その後の一悶着のあと、カーチャーは “Ishmael belatedly digest the intuitions he

has had about how irrelevant a man's skin color is to his character, and why people of different skin color fear each other as devils”と述べ、イシュメル自身における偏見の意識化が人種差別の克服につながると示唆する (Karcher 67)。加えて、その事件以降、クイークエグが野蛮などではなく文明化され高貴な振る舞いをするのがイシュメルに彼への評価をさらに改めさせる。例として、イシュメルの着替えのときのプライベートへの配慮があり、また彼がアメリカの船乗りの人々より落ち着きのある態度をみせたことが挙げられよう。このような偏見克服の過程を経て、カーチャーはイシュメルが文化相対主義を達成すると説く。

カーチャーは確かにイシュメル自身の人種差別についての意識化を鮮明に分析しているが、彼女の説明には問題があり、別の視点が必要だと思われる。その問題とは、文化相対主義の達成は必ずしもイシュメルの人種に対する偏見の克服を意味しない、ということだ。考えてみれば、確かに彼は自身の偏見の意識化には成功しているかもしれないが、彼の文化相対主義の達成はあくまで彼の支配的イデオロギーに準拠している。例えば、着替えのときにクイークエグがプライベートを気遣うことが文明化され、思慮がある証と語られていることは、クイークエグへのイシュメルの評価が文明／野蛮などの二項対立に基づいていることを示し、この基準はイシュメルのなかで内面化されている文化の規範だと考えられる。したがって、カーチャーの議論では二人の関係が文化の排他的規範とは別の仕方で行われているとは言えなくなる。

他方、サミュエル・オッターは、主に骨相学を通して身体が意味をもつようになる構造を分析し、文化の規範がどのように身体に現れるかを分析する²。オッターは19世紀において身体に関する学問が人間の種を規定することについて言及する³。

The corporeal quest in *Moby-Dick* is an ethnological quest . . . in the comprehensive nineteenth-century sense in which the racial body was seen to contain the secrets of the world and the effort to decipher its part was seen as crucial for the articulation of the national order. (Otter 143)

彼によれば、作品が書かれた時代、「人種的身體が世界の秘密を有しているとみられて」おり、身体的特徴をカテゴライズしていくことによって「国家の秩序の分節」が可能になるという⁴。ここで注意すべきは、人種的な特徴によって身体を分類することを通して、「世界の」秘密を知ることが人類の起源をたどるという目的を持っているということ、そしてこの作業は主に観察という手段をとって行われることである。人類の起源を探ることは文化の規範による境界画定に信憑性を与える作業であると同時に、身体に意味を付与する仕方によってその画定を推し進めるものだと考えられる。そして重要なことは、オッターが“for Melville the skin is more than a ‘looking glass’ whose surface reflects the distorted desires of the viewer”と主張するように、人種に関して身体に意味を与える作業がそれを行う観察者（主体）の分節化、および差異化の構造、

欲望を逆照射することを可能にすることである (Otter 144-45)。その欲望とはすなわち、所有の欲望である。

この差異化の構造は、イシュメルが鯨を観察する場面において明らかにされる。というのも、イシュメルが「鯨学」の章などで試みていることは、民族学の行う分類と相違ないと思われるからだ。イシュメルは「鯨学」の章などで頓挫してしまった分節の作業を実際に骨相学と人相学を通して実行しようとする。つまり、鯨を知り、分類するために頭の構造に迫ろうと（あるいは頭のなかに入ろうと）するのだが、鯨の頭のなかは鯨油で満たされており、脳はとても小さいと作品中で語られる。これは、オッターが、イシュメルが “these [internal] capacities mold the very structure of the brain and shape of the skull” と考えていると指摘することから、脳の大きさと中身の大きさの不一致を意味する (Otter 154)。他方で鯨の顔に鼻がなく、人相学に当てはめられないことから、イシュメルの鯨の分類は失敗すると言えよう。まとめると、主に骨相学などを通して、頭の構造と中身の一致を導かんとする方法が、カテゴライズするときに経る過程の一部なのだ。

さらに、同じことがクイクエグに対しても行われる。初めて会うことになるスパウター・インの部屋でイシュメルがクイクエグに気付かれないときに、彼の “bald purplish head” と白人の “a mildewed skull” を比べる (Melville 20)。しかし、彼との悶着が終わった後、イシュメルは彼と身体を接触させて眠ることになり、異人種である彼を “a cosy, loving pair” と称すようになる (Melville 46)。オッターはこの評価の要因を、イシュメルが（骨相学などを通じた）観察ではなく、身体的接触という別の仕方によって彼と関係をもったからだと考えている (Otter 160-61)⁵。すなわち、イシュメルは観察による分類をするのではなく、カーチャーによる分析とは異なり、クイクエグを理解できない他者として彼と接近することになるのである。カーチャーにおいてはクイクエグは “racial figure”、つまり象徴として理解されたのであったが、オッターにおいては謎を含む、そして所有できないような他者として考えられている。クイクエグにはもはや人類の起源をたどる道筋などはなく、骨相学もジョージ・ワシントンのような頭をもつ彼には当てはめることができない。だからこそ、彼はイシュメルなどにとって不安を呼び起こす存在となり、同時に誘惑する存在にもなる。例えば、イシュメルは異人種である彼が平静に、優雅に話し、振る舞うのを見て白人である自分の方が野蛮だと思うのであるが、オッターは、このような “the gap between speaker and spoken, saying and being”こそメルヴィルが考察したものであり、クイクエグが引き起こすものなのだという (Otter 162)⁶。さらに詳しく言えば、そのギャップこそイシュメルが内面化している支配的イデオロギーを揺るがすことになる。

オッターの考えを踏まえて、このような理解および所有できない他者としてクイクエグと関係を結ぶ限り、イシュメル（たち）は文化の規範とは別の仕方と彼と接することができるだろう。しかし、このような関係を「友情」と呼べるのだろうか。あるいは、「友情」とはどのような関係を指すのだろうか。他者との関係に関わる困難を明記しな

がら、次節で「友情」と分析することの危険性について考えたい。

4. 友情と分析することに伴う問題

理解および所有できない他者との関係には大きな困難があると思われる。それは、絶対に理解、到達できない他者とのようにして関係をもつことができるのか、という問題である。オッターも二人の関係について(その機能や効果については分析しながらも)、理解できない他者との関係というようにしか言えていないように思われる。この到達しえない他者との関係とは友情なのか、そうでないとしたら一体何なのか。この疑問を考える前に「友情」の分析の問題について考えてみたい。というのも、2節で触れた通り、「友情」は支配的イデオロギーの影響を受けているとみられるからだ。では、その影響とはいったいどのようなものか。

今までの研究で、二人の関係を、結婚やあるいは同性愛に結びつけながらも、友情と記してきた批評は多い。例えば、ニュートン・アーヴィンは、孤独だったイシュメルがクイクエグと出会い友情を形成することで、臥薪嘗胆を体現するエイハブの死へ向かう旅の中で、生きる意志を取り戻すことができたと考えている (Arvin 171)。アーヴィンは二人の友情を愛に結びつけている関係だと言う。しかも彼は “it is the imagination of an even more comprehensive love” と述べるように、その愛は理想的な、相思相愛で包み込むようなものだとしている (Arvin 174)。アーヴィンは二人の友情の性質を(同性愛ではないような)愛と結びつけて規定していると思われる。また、似たような分析をした者として先にも引用したキャロライン・カーチャーがいる。カーチャーは二人の関係が結婚だと語られるために、友情を “love marriage” と結びつけて考える (Karcher 71)。カーチャーはその結婚の特徴を、“an egalitarian marriage of the races” とし、人種差別がなく、後にイシュメルを生存に導くような人間性あふれる “human solidarity” であると述べる (Karcher 72-73)。カーチャーもアーヴィンと同じく、二人の友情を同性愛ではなく(もちろん二人の批評家はこの要素を否定していない)、より理想的で幻想的な愛の関係として理解する⁷。つまり、この愛は一種の神話的愛を前提としているのであり、そこでは二人が一つに溶け合うようなものであるというニュアンスがある。そして二人の批評家が共通して主張するのは、この二人の間の愛や友情がエイハブ率いる死への航海からイシュメルを救うということである。

一方で、二人の友情を同性愛と結びつける批評家もいる。その一人であるマーティンは、同性愛を、支配的で父権的な社会的体系に対抗するような、排他的ではない社会的潜在可能性だと捉える。その理由は、支配的イデオロギーが文化的、人種的、性的な役割を押し付けて個人を抑圧するものであり、同性愛が排除を前提としない関係をつくる一助をなすと彼が考えるからである (Martin 77-79)。そして、イシュメルとクイクエグがつくる同性愛が対抗するのは父権的イデオロギーであるが、マーティンはこのイ

デオロギーをエイハブが体現すると考えている。これは、上の批評家二人と同じく、イシュメルとクイクエグの関係が、エイハブの死を導く旅からイシュメルを救うというマーティンの主張を表すものである。

以上、三人の批評家をとりあげたが、共通するのは、イシュメルとクイクエグの二人の友情が愛と同質であり、支配的イデオロギーから二人が抜けだすことの一助になっていることに三人の批評家の主眼が置かれていることであると言っている。それぞれの批評家に個々に反論をすることは可能だが、ここでは、友情に関する批評の問題点に焦点を絞りたい⁸。その問題点とは、すなわち、「友情」がある種の理想的な関係として措定されている可能性があることである。確かに「友情」は（支配的イデオロギーの外にある）親密なつながりを想起させる。しかし、この友情は、いわゆる兄弟愛という理想に基づいており、その兄弟愛自体がイデオロギー的である可能性があるのだ。

ここで、ジャック・デリダの兄弟愛についての分析を援用したい。デリダは友情のかたちとして兄弟愛が付随してきたことを系譜学的手法で明らかにする。そして彼は、その兄弟愛という概念は、出生の地が同じであること、すなわち親族性や同質性に基づくということ明らかにしている（148-67）。これが意味することは、兄弟愛というのは決して親密性のみを表すということではなく、その親密性が実は「同じであること」の基盤によって起こるということであり、異質な者を排除するということだ。そして友情がこの兄弟愛という理想に影響を受けてきていることは、「友情」という概念自体が排他的な性質をもち、支配的イデオロギーに関わるものであることにつながる。

さて、話を『白鯨』の友情についての批評の問題に戻そう。これまでのイシュメルとクイクエグの関係が友情と分析されてきたことは、実は批評家自身にも内面化されている支配的イデオロギーが二人の関係に持ち込まれることを意味する。例えば、カーチャーは二人の関係性について、兄弟（brother）の表現を用いながらクイクエグと「一つになること」がイシュメルを救うという（Karcher 74-75）。また、マーティンは、クイクエグが発揮する愛を“Queequeg's brotherly love”と大胆に表す（Martin 91）。結果的に彼らの批評は、支配的イデオロギーとは異なったかたちでのイシュメルとクイクエグの関係の可能性を見出す目的に逆行して、文化の規範内に二人の関係を見出すことになる。そしてこの作業は、結局はクイクエグ（やイシュメル）を縫合し、彼の他者性を無視することにもつながってしまうのだ。

「友情」について批評するとき、批評家は彼らの関係に対する分析の方法や視点に注意しなければならない。それがクイクエグの他者性に配慮した分析ならばなおさらである。しかし、本節最初で述べたが、包摂できない他者との関係とはいったいどのような関係なのだろうか。この（他者との）関係自体の問いは、1節で書いたように、あまり考えられてこなかったように思われるが、本稿ではこの関係を友愛と呼び、その可能性を探っていきたい。友愛をここまでの議論を下敷きに定義づけると、支配的イデオロギーとは別の仕方、完全に理解できない他者と結ぶ関係とすることができるだろう。次節において、この友愛をもう少し掘り下げるために、性愛と関連させて論じていく。

5. 『白鯨』における性愛と他者との関係

本節でも、主にイシュメルとクイーケグの友愛について考えていくわけだが、ここで一つ二人の関係を分析することの反論になりうることについて確認したいことがある。それは、ハリソン・ヘイフォードが指摘するように、物語が進むにつれ、イシュメルの友となったはずのクイーケグが登場する頻度が減っていくことについてだ (Hayford 149)。しかし、この事実は決してクイーケグの重要性を損なわず、二人の友愛は二人が一緒に行動しているかということ、および物理的な距離によって左右されない。むしろ、忘れたころにやってくるように、漁の際の活躍の他に、クイーケグはイシュメルとロープで結ばれる場面や鯨油絞りという注目をひくような場面で登場することを考慮すれば、彼の重要性は失われるどころか増していくと思われる。よって、イシュメルとクイーケグの関係にはより多くの注意が払われなくてはならないことになる。

クイーケグは物語において重要な人物であり、包摂されない他者である。この他者との関係において分析しなければならないのは同性愛の問題であろう。というのも、フォーコーが、同性愛は文化の規範によらない関係を開くことであるからこそ、“*And, no doubt, that’s the real reason why homosexuality is not a form of desire but something desirable*” と述べているように、支配的イデオロギーや文化の規範における関係とは別の関係をつくる可能性が同性愛にはあるからである。ではその関係とはどのようなものなのだろうか。

マーティンはイシュメルのナルシッサスのイメージと同性愛を結びつける。物語の始めに一人で海へ赴こうとするイシュメルは孤独ながらも、“*as a figure of Narcissus, he [Ishmael] is an image of the desire to overcome that isolation by joining self and other*” というように、マーティンは孤独を超えようとする姿を彼に見出す (Martin 73)。さらにマーティンはナルシッサスのイメージを読み直し、文化の規範に対抗するような自己の身体的快楽に結びつけられる (ナルシッサスの) 愛が重要だという (Martin 73)。ここでただちに、マーティンの言うナルシッサス的で身体的快楽を目指す愛による孤独の解消は、自己と他人の一体化、すなわち包摂の可能性があるという反論が提出されよう。確かに、ナルシッサス的愛は文化の規範が押し付ける性愛に対して抵抗するかもしれないが、その愛は結局、新しい自己の発見、あるいは措定に向かっており、その名の通り、自分のための愛でしかない。そのとき他人は自己と同質なものとして解釈されるだけである。

しかしながら、マーティンが指摘する孤独の状態は友愛にとってヒントとなる語である。なぜなら、包摂できない他者としてあるクイーケグとイシュメルの間 (もしくは他の船員たちとの間) には、互いが互いに到達できないような深淵があるからこそ、一人一人は孤独である他ないからだ。人は他者からの認識によって自己をたて、その主体

が他者を認識することによってこの状態を解決しようとする。しかし、(後に主体によって忘れられてしまいがちだが) 自己は他者からの認識があってはじめて成り立つということを考えれば、自己という存在の自律性は他者ありきでしか存続できず、どこまでも他者に負っている。この他者との関係こそ、本稿において探求してきた友愛と呼べるのではないか。そこでは、他者との理解・到達できない距離を前提としながらも、その深淵や他者に自己の自律性を負っているということが主体において忘却されないような関係がつくられる。このような他者への有責性に基づいた、いかなる他者との関係をも否定せず、逆にそれを追い求めるようなものが友愛のように思われるのだ。

ここで同性愛と友愛が交差する。先にみたように、同性愛は文化の規範によって禁止されていた関係を開くものである。フーコーが「同性愛は欲望のかたちではなく欲望可能な何かである」と言うとき、欲望が向かう先である他者が目指されている。ただ、同性愛は「欲望のかたち」、自己同一性に関わるときがあることも忘れてはならない。ここで重要なことは、同性愛が二項対立と関わって排他的なものであるとき、それはマーティンの論に対する分析で示したように、他者を包摂する構造となってしまうということだ。つまり、同性愛について分析するときでさえも、同性愛が一種の構造、あるいは(関係の) カテゴリーとなってしまう可能性がある。

これは具体的にはどういうことか。例えば、同性愛が支配的イデオロギーの外にある、というとき、この愛はカテゴライズされてしまうだろう。カレブ・クレインは、食人種であるという理由からクイークエグを権力体系の範囲の外にいるという考えのもと、イシュメルとクイークエグの同性愛を分析する。クレインは、イシュメルはクイークエグと密着しながら寝るという過程を通して自身のアイデンティティや統合性に不安を感じるのだが、“*Queequeg dispels the fear of having broken the rules, perhaps because he is outside them*” と分析するように、「しきたりを破ってしまった事に対する不安は、クイークエグが取り払ってくれ」、その理由は「おそらく彼がしきたりの外側に位置するから」だと考えている (Crain 46)。クレインによれば、同性愛をおわせる行動がイシュメルに自己整合性への不安を呼び起こすが、彼は、クイークエグが異人種で自分とは違う習慣や風習をもっているのだから仕方ない、という理由づけによってその不安を取り除くという。だが、この分析は、クイークエグを異人種として境界画定をし、イシュメルが同性愛の趣向を自分のものではなく文化の規範の外側にあるものとして追いやるという帰結を導くだろう。この同性愛という性質の恣意的排除は、クイークエグを人種によって境界画定することによって起きる。このとき、イシュメルから見て(クイークエグにとっては普通のものだと分かっている) 同性愛はクイークエグのアイデンティティの起源の一部として設定されてしまい、他者への関係の可能性が途切れることになる。要するに、支配的イデオロギーの外／内、同性愛／異性愛、他人／自己という二項対立に関わるものとして同性愛を規定、分析することは友愛につながらない。

クレインの引用の内容は間違っているわけではない。イシュメルにも、クイークエグ

を食人種として境界画定したいという欲望はあると思われるし、そのような彼の主体性を暴くことがこの批評家のねらいである。しかし、二人の関係性において、より注目すべきなのはイシュメルが感じる不安の方なのではないか。というのも、この不安を感じることは、支配的イデオロギーを内面化するイシュメルにおいて、彼自身の（同性愛への欲望を）読み飛ばしたいという欲望を表すものであり、その欲望に気付くことを示すからだ。そしてこの気付きは、文化の規範によって排除されていた他者との関係への気付きであり、彼自身のアイデンティティの措定と結びつかないかたちの、そしてフーコーの言うような支配的イデオロギーに排除されたはずの他者との関係の開きの可能性をもつような、従来みなされているものとは異なる仕方、関係を、つまりオルタナティブな同性愛を導く可能性を指すのではないだろうか。

レオ・ベルサーニはメルヴィルの『白鯨』において“Melville’s characters have no sexual subjectivity at all”と述べ、その理由として同性愛の欲望を体現する主体性がないからだとしている（Bersani 146）。これは2節で言及した、マーティンが分析する、男だけの空間では性は排除されるということが原因だと思われる。またピークオッド号では、“homosexual situation that are psychologically inconsequential, unconnected to characterization”があるとベルサーニは述べるが、これは登場人物たちの内面が形而上学的、つまり社会倫理などの支配的イデオロギーに規定されたものとしてしか設定されていないためだという（Bersani 146）。これはキャラクターの内面が抑圧を通して形成されているために、排除されるべき同性愛の欲望が表出されたとき、その欲望がそれぞれの内面、アイデンティティへと帰着できず、主体性を表すことなく、いわば宙に浮いた状態になるということを示す点で興味深い。つまり、同性愛をほのめかす状況があっても、男だけの空間で個々人において性が抑圧されているために彼らが同性愛の欲望を受け入れるシニフィエとなれないから、その欲望自体はどこにも落ち着くところがない。したがって、この宙に浮いた同性愛的欲望は帰属先をもたないかわりに指向性のみをもつことになると考えられる。すると、この同性愛の欲望は文化の規範によってこれまで閉ざされていた他者との関係を目指すようなオルタナティブな同性愛の可能性を表すことになるだろう。当然、この欲望はイシュメルたち自身のものとして主体性に帰着されないことには注意は必要だが、むしろ、帰着されずに宙にとどまり続けるからこそ、語り手イシュメルが彼自身とクイクエグのロープでつながれた状態を“inseparable twin brother[s]”（Melville 266）と表現するとき、その理想的な兄弟愛の「関係」にその欲望が入り込んでいる可能性が考えられるのではないだろうか。

ただ、文化の規範によって除外された者との関係を望むことは何も同性愛に限ったことではない。舌津智之は、イヴ・セジウィックの分析手法を援用しながら、手絞りの場面における感傷が船員たちにセクシュアリティを横断して表れることについて以下のよう

ここで半ばユーモアをも漂わせる感傷的主体は、いわば同性愛の暗示を安全弁にしてその柔らかな女性性を解き放つのであり、つまり、この場面にそのためらいがちな表出をみるのは、抑圧された同性愛感情であると同時に、禁止された感傷的異性愛感情でもある可能性は否定できない。(38)

一般的に（この時代では）感傷とは女性の性質に結びつけられることが多いのだが、男性が感傷を抱かないというわけではない。ただ、男らしさの要請が男性たちをステレオタイプ的な主体に押し込めるのであり、男性たちに許される異性愛は感傷的なものではなく、陸に残した妻のために死を覚悟して冒険するというヒロイックで理想的（かつ幻想的）な役割によるものである。この文化の規範によって抑圧された感傷的異性愛は、同じく禁じられた同性愛と同時に表出される可能性があり、男女間のステレオタイプのキャラクターを演じることは別の仕方での性愛を導く。この舌津の分析はジェンダーのみならず性愛の脱構築をもたらし、包摂できない他者の関係としての異性愛を示唆する。そして、文化の規範によって排除される可能性があるのは他者との関係だけでなく、関係の多様性でもある。

性愛に関して、それがカテゴライズされずに何らかの典型が見出されない限りにおいて、人はあらゆる他者との関係を排除せずにいることができ、その関係の可能性を開くことになる。そしてこの排除しない仕方においてのみ友愛が可能になる。しかし、これは友愛がこのような性愛を通してのみ実現することを意味するのではない。逆に友愛という、包摂できない他者との関係を求めることによって性愛が可能になるといえると思われる。つまり、友愛があるからこそ、他者との関係をもたんとする性愛が可能になるのである。

6. まとめと展望

簡単に言えばここでの友愛とは所有できない他者との関係を結びたいと思うこととして論じてきた。ただ、先の性愛と友愛の分析を踏まえると、友愛とは他者との関係への欲望そのものを欲望することであるとも言えよう。他者との関係への欲望を欲望することは、他者の完全な理解、規定の不可能性を欲望するということである。この理解不可能性という深淵なしには友愛は結ばれない。ある支配的イデオロギーによって包摂できない他者を理解できていると思ってもそれは認識し合う関係でイデオロギーを共有する他者の思考によってであって、純粋な自己の自律性によるものではない。よって完全な他者の包摂不可能性なしには自己の自律性も成立しないことは忘却、隠蔽されるべきではない。

ただ、友愛において（他者によってたった）自己が文化の規範内で他者の他者性を無視し、その他者を排除するような、二項対立的関係がつくられるという可能性は否定されるべきではない。むしろ、そのような文化の規範に沿った関係は、友愛があるからこ

そ可能なのである。すなわち、包摂できないあらゆる他者との友愛がまずあって、そこから他者の認識によって自己がたてられた後、友愛の状態が忘却されてしまうことによってはじめて、文化の規範によって特定の 카테고리化を受けた他者が排除されるという状態が可能になるのである。ということは、いかなる友／敵の関係、あるいはあらゆる二項対立に基づいた関係は、友愛というものがあってこそ存在することになる。そして、本稿でも論じたように、カテゴリライズしないような性愛こそがその閉じた関係を開くことができる。

だからこそ、イシュメルとクイーケグの友愛だけではなく、他の船員たちとの関係や、不和が起こった場面について、より詳細な分析が求められると考えられる。研究の方向は、友（愛）だけではなく、敵対関係にも向けられなければならないだろう。というのも、ある者たちが敵対していたとしても、そこに友愛の可能性があるのであり、ましてや、敵を愛している可能性さえあるからである⁹。敵対するにしても他者が必要なものであり、その関係が友愛に基づいているかもしれないことは、友愛の分析において無視されるべきではないだろう。

また、友愛と愛は異なるのであろうか。友愛を研究する以上、近接した概念との関係を考えることは必須である。そのために、そもそも愛と性愛とは異なるのかということなどについても考察していく必要がある。ただ、この作業は4節で行ったように、ある概念がどのように使われてきたのかということ意識しながら行われなければならない。これは、この注意なしには、本編の分析が小説の人物たちの関係を包摂しかねないためである。これらの研究を通して、友愛についてのさらなる疑問——『白鯨』における友愛に女性は関係ないのか、友愛において自己の自律性に頼らない関係はないのかなど——を考える土台が作られる。

そして最後に、イシュメルや他の人物の主体性についての分析もより複合的に行うべきであろう。例えば、本稿では、人種と性愛の問題を分けて取り扱ったのだが、カレブ・クレインが分析しているように食人種とホモセクシュアルを関連させながらイシュメルたちの主体性についてを考察する方法は本作品の友愛についての研究の一助となると思われる。というのも、主体性とどう向き合うかということが友愛の研究について重要だからだ。友愛があるからこそ主体性の構築は可能になるのだが、この逆は成り立たない。つまり、主体性なしにつくられる友愛の可能性があるということだ。そのようなオルタナティブな親密な関係を研究していくことで、『白鯨』研究の更なる展開を期待できるのではないだろうか。

注

¹ この性が異性愛の要素も含むことは興味深い。男だけの空間ではたとえ異性愛的な感情でも排除されなくてはならない。この抑圧された性の表出については後の5節にて分析する。

2 カーチャーも “Ishmael’s most radical departure from the racial prejudice . . . consists in ascribing phrenological excellence to Queequeg’s negroid cranial conformation” と、骨相学が人種に対する偏見に占める重要性を認めている (Karcher 70)。

3 当時の骨相学の詳しい分析については Otter 101-18 を参照。

4 当時の人種概念の占める重要性については Knox2 を参照。

5 オッターは観察ではなく接触によってつくられるつながりがオルタナティブな、クイークエグを他者とした関係に結びつくと言っているが、この接触という方法にも注意する必要があるだろう。ウェンディ・アン・リーは自身の「バートルビー」論において、身体（動き）と感情の関係についての系譜学的分析を行っている。彼女は現代のアフェクト・セオリーに至るまでの感情についての理論は身体／精神、動き／感情の二項対立に基盤をおくと鋭く指摘している。この二項対立は感情＝原因、動き＝結果という二項対立に帰結する。彼女によれば、この一連の二項対立はホップズの理論に基づいており、そこではある主体の動きやその原因となる感情は客体（他人）の動きへの抵抗として理解されている (Lee 1408-09)。つまり、ある客体、他人が動くことで、その動きの力を受けたある主体の内側まで到達すると、その他人の動きへの抵抗として主体の感情が「動いて」行動につながることになる。“Moving begins by being moved, touching by being touched” と彼女が述べる通り、主体の動作は客体の動作なしには起こらないということだ (Lee 1409)。もし、イシュメルの接触がこの「触れることは触れられることで始まる」という関係に基づいているならば、彼はクイークエグのことを客体として何らかの主体性を相手の身体の中に見出してしまうことになる。したがって彼が相手を “a cosy, loving pair” とみなすときでさえ、彼の感じる愛情がクイークエグの動きへの抵抗である可能性があることを考慮しなければならない。占有できない他者との関係の形成の可能性を接触に見るためには、まずイシュメルの身体と感情の関係に関わる主体性について分析される必要がある。

6 この分析の似たような手法としてバーバラ・ジョンソンの『ピリー・バッド』論を挙げることができるだろう。彼女は登場人物の性質と行動（あるいは宿命）の不一致の問題を取り上げている (291-93)。

7 ここで、カーチャーが “he [Melville] knew he could get away with dramatizing a happy interracial marriage by disguising it as a male comradeship which his public would not dare interpret as homosexual” と鋭く指摘していることは興味深い (Karcher 71)。この分析は本稿 2 節で論じた、支配的イデオロギーにおいては友情と同性愛が区別されるべきものとして認識されていた、ということをサポートするものになると思われる。

8 エイハブをイシュメルの敵のように書くことには注意が必要だ。2 節でも言及した通り、エイハブも支配的イデオロギーに対抗しようとした人物であり、クイークエグやピップとの友情、友愛の可能性は考察されるべきである。

9 例えば、ハリエット・ハステイスは、これまでの研究においてエイハブの肉体的欠陥が彼の逸脱性とナルシズムに、そして孤独と周囲への敵対へと結びつけられてきたことに反論している。ハステイスによれば、イシュメルの語りにおいては彼の肉体的欠陥は（力あふれる）精神の状態とのギャップがあり、さらに、“Ishmael’s first impression of Ahab is that he appears to be quite able-bodied” であることが今まで見逃されてきたという (38)。ハステイスの指摘は、イシュメルの語りによって身体／精神の関係が脱構築され、エイハブがただ孤独で他の人物たちに敵対するだけの人物ではない可能性があることを教えてくれる。そしてこ

の可能性はエイハブと他の人物とのオルタナティブな友愛につながる可能性があることを示すだろう。

引用文献

- Arvin, Newton. *Herman Melville*. Methuen, 1950.
- Bersani, Leo. *The Culture of Redemption*. Harvard UP, 1990.
- Crain, Caleb. "Lovers of Human Flesh: Homosexuality and Cannibalism in Melville's Novels." *American Literature: A Journal of Literary History, Criticism, and Bibliography*, vol. 66, no. 1, Mar. 1994, pp. 25-53.
- Foucault, Michel. "Friendship as a Way of Life." *Caring Labor: An Archive*, 18 Nov. 2010, caringlabor.wordpress.com/2010/11/18/michel-foucault-friendship-as-a-way-of-life/.
- Hayford, Harrison. "Unnecessary Duplicates: A Key to the Writing of *Moby-Dick*." *New Perspectives on Melville*, edited by Faith Pullin, Edinburgh UP, 1978, pp. 128-61.
- Hustis, Harriet. "'Universal Mixing' and Interpenetrating Standing: Disability and Community in Melville's *Moby-Dick*." *Nineteenth-Century Literature*, vol. 69, no. 1, June 2014, pp. 26-55.
- Karcher, Carolyn L. *Shadow over the Promised Land: Slavery, Race, and Violence in Melville's America*. Louisiana State UP, 1980.
- Knox, Robert. *The Races of Men: A Philosophical Enquiry into the Influence of Race over the Destinies of Nations*. 2nd ed., H. Renshaw, 1862.
- Lee, Wendy Anne. "The Scandal of Insensibility; or, the Bartleby Problem." *PMLA*, vol. 130, no. 5, Oct. 2015, pp. 1405-19.
- Martin, Robert K. *Hero, Captain, and Stranger: Male Friendship, Social Critique, and Literary Form in the Sea Novels of Herman Melville*. U of North Carolina P, 1986.
- Melville, Herman. *Moby-Dick; or, The Whale*. Wordsworth Classics, 1993.
- Morrison, Toni. "Unspeakable Things Unspoken: The Afro-American Presence in American Literature." *Michigan Quarterly Review*, vol. 28, no. 1, Winter 1989, pp. 1-34.
- Otter, Samuel. *Melville's Anatomies*. U of California P, 1999.
- Tanner, Tony. *City of Words: American Fiction, 1950-1970*. Jonathan Cape, 1976.
- ジョンソン、バーバラ「メルヴィルの拳——『ビリー・バッド』の処理」志村正雄訳『鯨とテキスト』大橋健三郎編、国書刊行会、1983年、285-340頁。
- 舌津智之『抒情するアメリカ——モダニズム文学の明滅』研究社、2009年。
- デリダ、ジャック『友愛のポリティックス 1』鶴飼哲・大西雅一郎・松葉洋一訳、みすず書房、2003年。
- 牧野有通『世界を覆う白い幻影——メルヴィルとアメリカ・アイデオロジー』南雲堂、1998年。